

教宣 せぶん

新) プロレス論

いま、プロレスには大きく分けて2つの流れがあると思います。ひとつは昔ながらのショーとしてのプロレス。見せ場があり、悪役がいたり、ヒーローがいたり、わかりやすく言うと、ロープに飛ばした相手が返ってくるというシナリオのあるプロレスです。かたやひとつはどちらが勝つかわからない真剣勝負の、格闘技としてのプロレスです。わかりやすく言うと、勝負が終わった後にはお互いの健闘を讃え合うスポーツとしてのプロレスです。

力道山の時代は知らないまでも、ロープに飛ばした相手が返ってくるプロレスしかなかった時代からのプロレスファンからすると、プロレスを純粋なスポーツ、真剣勝負の格闘技にした「革命」はまさにセンセーショナルなものでした。その革命家は前田日明や高田延彦だと思いますが、前田が「ロープに飛ばした相手が返ってくる」プロレス団体に所属していた駆け出しの頃、ディックマードックというアメリカの強豪レスラーと対戦した試合をテレビで見ました。今から思えばですが、当時から真剣勝負を欲していた前田は、なんとディックマードックの顔面にキックを入れたのです。暗黙の了解やシナリオがある当時のプロレスでは決して見たことのない「荒技」でした。この顔面キックに怒ったディックマードックは、格下の、若造である前田の顔面に思い切りパンチを浴びせ、「真剣」に前田を叩きのめしてしまいました。前田の顔面キックに、本気モードになった強豪レスラーの顔がブラウン管を通してハッキリとわかりました。その後、前田は高田ら同士とともにUWFという関節技を中心にした「真剣勝負」のプロレス団体を旗揚げし、いまのスポーツとしてのプロレスの潮流をつくりました。

いまでは、ショーとしてのプロレスをまったく見る気になれなくなりました。もちろん、プロレスファンの中には昔ながらのショーとしてのプロレスの方がおもしろいという方もいるのですが、私は、本物を見てしまった、本物に触れてしまった時に、本物ではない片方にまったく興味がもてなくなったという感覚に陥っています。

このプロレスを通して感じた「本物感」を、いまあらためて全損保という組織に感じています。シナリオがあった、「なあなあ」の労使関係だった旧日勤火災時代の組合活動が、本物に触れてからというもの、とても陳腐なものに感じています。働くものをまもる、労働条件をまもろうという本来の、真の労働組合の運動をすすめようとする時に、「なあなあ」の労使関係などまったく役に立たないことも経験しましたし、本当の運動、本当のたたかいがどういうものなのか、身をもって経験しました。分裂以来、このたたかいをすすめている仲間も、この全損保の「本物感」、このたたかいの「実感」を異口同音に口にしています。

私はこの「実感」を、一番に現役の全損保組合員に伝えたいと思います。今回はプロレスファンにしかわからない、マニアックな喩えでしたが、これからもこの「実感」を色々な喩えで表現していこうと思います。